

『悪い、入院した』

マブおじさんから同人音楽同好会の面々にそのメールが送信されたのは、某夏のお祭りの原稿の締め切り一週間前だった。

同好会のメンバーはちょうど原稿に追われて睡眠時間をがりがりと削っている中でのメール。宮環さんをはじめとした同好会の面々は、そのメールを見て驚愕した。驚愕というか、むしろ激怒した。メロスも真っ青の激怒っぷりだった。このタイミングで入院なんて、空気が読めないにも程があるだろうと。

もはや悪態をつく気も起きず、とりあえずマブおじさんの分の原稿をみんなで分担して作業することにした。マブおじさんが入院しようが、締め切りは延びない。マブおじさんよりも締め切りの方が大事なのは誰の目から見ても自明である。最悪、マブおじさんには草葉の陰から見守っておいて貰えほしい。そんなことを考えながら、各自原稿に没頭した。

その甲斐もあってか、某お祭りの原稿は何とか締め切り当日に脱稿。マブおじさんがいない所為でお祭り当日の店番の人手が足りないという危機も、関西在住・マゾつけたっぷりの大学院生がピンクのタンクトップを着るというマゾっぷりを存分に発揮させて乗り切ることができた。

そんな訳で、宮環さんたちがマブおじさんの見舞いに行こうかと思うやく考えだしたのは、お祭りが終わった翌週の日曜日。

そこからさらに同好会メンバー全員で協議を五回ほど繰り返した（そのうち四回の協議では、お見舞いの提案は棄却されている）、ようやくお見舞いへ向かうことになった。マブおじさんが入院して、二ヶ月が経過しようとしていた。

マブおじさん（本名・群馬武）は群馬在住である。よって、入院先の病院も、未開の地・群馬の奥の奥。グー●ルマップで調べようと思つたら、未開すぎて読み込みエラーが出るほどの場所だった。

宮環さんたちは上野から電車に乗って群馬に向かった。気分はさながら、戦地に向かう兵士のよう。未開の地の怪物に太刀打ちできるのだろうか。

病室に着くと、そこにはカテーテルを全身に挿入され、よく分からない機器にケーブルがつながれ、最先端の延命治療が施されている……訳は無く、単純に病院着を来てベッドに横たわるマブおじさん（三十六歳独身）がいた。

「マブおじさん、なんで入院したの？」

宮環さんはみんなで共同購入したお見舞い品をベッドのそばに置いた。ビニール袋からはみ出ているのは、マブおじさんの好物であるマッカンだった。マブおじさんは見かけによらず、甘党なのである。

他にもCDやら漫画やらがたくさん置いてあった。それらもすべて他の人のお見舞いのようだ。さすがマブさん、人脈だけはある。むしろ人脈しかない。

同人音楽同好会のメンバーはマブおじさんの入院の理由を聞いていなかった。てつきり、加齢による免疫能力の低下により、重症にでもなってくれたと思っていたのに。

「腰痛が悪化した」

マブおじさんはそう言いながら、腰に装着した白く、汚いコルセットを見せ付けた。

一同に殺意が芽生えた。

「いや、ライブの最前でヘドバンしていたら、腰が。ライブでヘドバンしないなんて、俺の流儀に反するし、ライブ主催者にも失礼だろ？」

なんと言い訳がましい。

「おっさん、なんのためにヘドバン講座したんだよ」

同人音楽同好会は、以前の冬のお祭りで「ヘドバン講座」のDVDを頒布していた。とある業界筋では有名なイニシャルKさんを講師として迎え、万全の体制でヘドバン講座を開催し、それをDVDに収めた。が、その実、中身はおのおのがずっと曲に合わせて自由にヘドバンしているだけだった。Kさんだけが嬉々として首を振りまくっていて、他のメンバーは白い面

をつけてヘドバンなんだか呪いの踊りなんだか、よく分からない動きをしている。間違って購入してしまった人たちにお悔やみ申し上げるレベルだった。

マブおじさんも実はそのビデオに出ていた。

のだが、結局、正しいヘドバンの仕方を習得できず、ライブでも自己流で激しいヘドバンをしていたらしい。結果、ライブで腰を痛めて入院。

ただの間抜けか。宮環さんは絶句した。返せ、このお見舞いに来た時間と交通費とお土産代を返せ。

宮環さんの隣では、同好会のメンバーである椎名も頭を抱えていた。やれやれ、という台詞が聞こえてきそうなほど、見事な頭の抱えっぷりだった。しかし、頭を抱えたところで、マブおじさんは反省してくれない。頭を抱える程度でマブおじさんが反省してくれるなら、ため息が出そうなほど美しい頭抱えをしてやるよ、と宮環さんと椎名は思う。

「あれ、そう言えば、かなたんは？ 今日のお見舞い、かなたんも来るって聞いてけど」

「あー、まだ来てないな。なんか用事があるから、後から合流するって言ってたけど。電話してみるか」

ケータイを取り出し、彼方さんに電話をかける。彼方さんは京都在住であるが、今週末はたまたま東京で用事があるので上

京してきていた。宮環さんと椎名さんが聞いた話では、午前中で用事が終わるので、午後にはお見舞いに向かうとのことだったのだが。

コール音三回目で、彼方さんは出た。

『ここ、どこ?』

盛大に迷っていた。

『東京駅から、上の方に向かう電車に乗ったんだけど、気付いたら上の方でも、ぐんまとは違うほうに行っちゃったみたい』

「……今、どこの駅にいるの?」

『んー、が、がそんし?』

『あびこかよ。群馬に来るのになんで常磐線に乗ってるんだよ』

『ちょうど電車が来てたから』

何も言えなかった。電車が来ていたのか。ならしやうがない。

乗ってしまったかもしれない。

『みやわさん、迎えに来てください。おねがいです、迎えに来てください』

『やだよ』

『お願いします、ふにふに!』

電話を切った。その三秒後に再コールがかかってくる。

『もしもし』

『なんで切るんですか』

「いや、気持ち悪かったから」

『本当にすいませんすいません、とりあえず上野まで戻るんで上野まで迎えに来てもらえませんか』

「……もう、しょうがないなあ」

宮環さんは溜息をつきながら、しぶしぶ彼方さんを迎えに行くために、病室を後にした。

病室は、マブおじさんと椎名さんの二人きりになった。

……どうしてこうなった? 椎名さんは考える。何故、宮環は彼方さんを迎えに行った? ここから上野とか、二時間はかかるだろうに。

思えば、椎名さんとマブおじさんが二人きりになる機会はそう多く無い。だいたい、椎名さんとマブおじさんが会う時は、宮環さんも一緒にいることが多いからだ。気まずいとかそういう気持ち云々より前に、この状況の意味が分からなかった。

「しーなくんしーなくん」

「ん? おっさんなに?」

「おしっこしたい」

椎名さんは、マブおじさんを殴る。綺麗な右ストレートが、マブおじさんの右頬に直撃した。

「痛い。その右ストレート、トレーニングを積んだものだな?」

プロの拳は凶器ひでぶ」

マブおじさんの抗議も、椎名さんは受け付けない。右ストリートに加え、左ジャブを叩き込み、右フックに繋げた。見事なコンビネーションだった。

「トイレくらい、独りで行け」

「でも、俺いま腰が悪いからさ、独りで歩くのは辛いんだよ」確かに、腰を痛めている中でトイレに行くのは辛いだろう。

その気持ちは分からなくはない。だが何故だろう、それをマブおじさんが言うとは、そこはかとなく苛立ちを覚えるのは。

「ねーねー、お願いだから、肩貸してよ」

上目遣いで、マブおじさんはお願ひする。椎名さんは本気で体重を乗せた一撃（ジヨルトブロー）を叩きつけようと思っただが、理性がそれを押さえ込む。一応補足しておくが、椎名さんはプロのボクサーでもなんでもない。

「………つたく。ほら、つかまれよ」

椎名さんは悪態をつきながら、マブおじさんに手を差し出す。マブおじさんは「さんきゅ」と、その手を握る。なんだかんだで手伝う椎名さんなのだった。

「………重く」

肩を貸すと、ずっしりとマブおじさんが体重をかけてきた。

マブおじさんは細身ではあるが、身長は高いため、椎名さんが肩を貸すと上から体重がかかる形になり、非常に負担になる。

「トイレは外出て、右」

「了解」

よいしょ、と一歩歩む。マブおじさんは、腰を庇うような変な歩き方で、椎名さんの隣を歩む。椎名さんは、ちらつと横顔を覗き込んだ。マブおじさんは痛みに顔を歪めて、額に汗の玉を浮かべながら、必死に歩いていった。

さっきはからかったりしたが、マブおじさんが腰痛に苦しんでいるのは事実なのだった。申し訳ない、と椎名さんは思っ一応、これでも同じ同人音楽同好会の仲間なのだ。もっと助け合いの精神が必要だ。

しかし、そう思ったのも一瞬だった。歩きたび、マブおじさんの顔が、苦悶に歪む。マブおじさんのイケメンが歪むのを見て、椎名さんは何故か嗜虐的な感情を覚えた。このイケメンを、もっと苛めてみたい。このイケメンが苦痛を堪えている姿を、もっと見てみたい。そういう感情が芽生え始めていた。

あれ、なんで俺、興奮してるんだろ？

椎名さんは自問自答しながら、自分の気持ちに素直になることにする。まず手始めに、腰のコルセットをつつく。

「――」

反応がない。コルセットじゃあ、無理か。それならばと、自分の肩にかかっているマブおじさんの体重を、うまい具合に分

散らせて、マブおじさんの負担をあげてみる。

「お、おお、おおおおお？」

マブおじさんは奇声を発しながら、ゆらゆらと揺れ始めた。

「あ、おじさん、ちょっと待て」

やりすぎた。バランスを崩したマブおじさんが全体重を椎名にかけてくる。椎名さん方が体格が小さいので、マブおじさんの全体重は支えきれない。

「うあああああ！」

どてどてどて、と小説みたいな音を立てて、マブおじさんと椎名は崩れ落ちる。

「いてててて……」

床に転げ落ちた拍子で、椎名さんはしこたま腰を打ち付けてしまった。痛い。これだと、俺もマブおじさんと同じようにコルセットを着けなきゃ——。

「！？」

目の前に、マブおじさんの顔面があった。びっくりして、心音が跳ねた。マブおじさんは椎名に覆いかぶさるように、倒れたのだった。椎名さんの胸に、マブおじさんの胸が重なる。とくんとくと、マブおじさんの心の臓の音を感じる。マブおじさんの長い前髪が、椎名さんの鼻先をくすぐる。

「ごめん、椎名くん」

「ど、どうでもいいから、どいてくれないか、おっさん」「どけない」「なんで」「腰が痛い」

そうか、腰が痛いのか、なら仕方がない。なんせ今、俺も腰が痛い。

「本当にごめんな、椎名くん」

再び、マブおじさんは謝る。椎名さんの眼前にあるマブおじさんの瞳は、少しだけ潤んでいるように見えた。掘りの深い顔立ちの中に浮かぶ、子犬のような瞳。

——かわいい、と思ってしまう。それと同時に、原始的な欲望が立ち昇る。それは、少しだけ、性の匂いがした。

「いいよ、謝らなくて」

つつけんどんに言いながら、自分の欲望を伝える。

「……ス、するなら………てやる」

「ごめん、椎名くん、聞こえない」

「キ………をするなら、許してやるって言ってるの！」

言うが早いか、椎名さんはマブおじさんの顎を掴み、自分の顔を近づけ——。

その後、この病院の女性看護師の間で、秘密裏にとある写真が取り交わされることになる。この時またマブおじさんと椎名さんは知らなかった。おわり。